

幕藩体制の動揺

幕藩体制は、100年余りを経過すると動揺しはじめ、社会のひずみや矛盾がみられるようになる。幕府は体制を維持するための諸改革を試みるが、人々の生存のための要求は、訴訟や一揆・打ちこわし(内憂)となり、新たな外国勢力の圧力(外患)も加わり、やがて幕藩体制の崩壊に至る。そこにはどのような背景や原因があったのだろうか。

1 幕政の改革

享保の改革

1716(享保元)年に7代將軍徳川家継が8歳で死去し、家康以来の宗家(本家)がとだえると、三家の紀伊藩主であった徳川吉宗が8代將軍になった。吉宗は29年間の將軍在職のあいだ、諸政策を実行して幕政の改革に取り組んだ。これを享保の改革と呼ぶ。

①東海道川崎宿の名主で、荻生徂徠に学び、『民間省要』という民政書を書いた。吉宗に登用されて民政に貢献した。

②旗本の人材登用に当たっては、大番頭5000石、大目付・町奉行・勘定奉行3000石などの役職による基準(役高)を定め、それ以下の禄高のものが就任する時、在職期間中のみ不足の石高(役料)をおぎなう足高の制を設けた。

③相対済し令は、17世紀後半以降、数度出されている。1718(享保3)年に江戸町奉行所が受けつけた訴訟は約3万6000件であり、このうち90%以上が金公事であった。

Q> 上げ米の令は、財政再建には有効だった反面、どのような問題が生じたのだろうか。

吉宗は徳川綱吉以来の側用人による側近政治をやめ、新設の御用取次を介して將軍の意思を幕政に反映させた。政策の実行のために旗本の大岡忠相や宿駅の名主であった田中丘隅ら、有能な人材を多く登用し、また荻生徂徠や室鳩巢らの儒学者を用いて、將軍みずから先頭に立って改革に取り組んだ。

改革の中心は、まず財政の再建にあった。1719(享保4)年、続発する金銀貸借についての争い(金公事)を幕府に訴えさせず、当事者間で解決させるために相対済し令を出した。また儉約令によって支出

上げ米の令

御旗本ニ召置かれ候御家人、御代々段々相増候。御蔵入高も先規よりハ多く候得共、御切米御扶持方、其外表立候御用筋の渡方ニ引合候ては、畢竟年々不足の事ニ候。……それニ付、御代々御沙汰之無き事ニ候得共、万石以上の面々より八木差し上げ候様ニ御せ付けらるべしと思召し、左候ハねば御家人の内数百人、御扶持召放さるべきより外は之無く候故、御恥辱を顧みられず御せ出され候。高壺万石ニ付八木百石積り差し上げらるべく候。……之に依り、在江戸半年充御免成され候間、緩々休息いたし候様ニ御せ出され候。(御触書寛保集成)

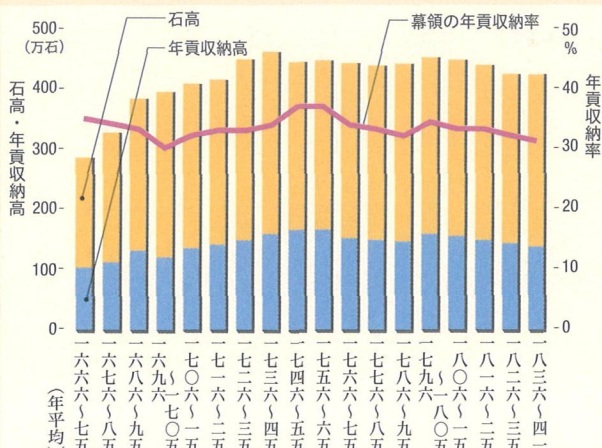
①幕領からの貢租収入。②旗本・御家人に支給する俸禄米。切米は春夏秋冬の三期に何俵かというように給され、扶持米は何人扶持(二人扶持は一日玄米五合というように給与された。③米。米の字を分解したもの。

読みといてみよう

徳川吉宗が「米公方」と呼ばれるほど、米価の安定を求めた背景は何だろうか。考えてみよう。

幕領の石高と年貢収納高 幕領は当初は300万石弱であったが、しだいに増加して元禄期(1688～1704年)に400万石前後となり、享保期(1716～36年)以降から幕末まで440万石程度であった。年貢収納率は、当初は高かったがしだいに低くなり、享保の改革の効果で上昇して宝暦期(1751～64年)に頂点に達し、その後、低下して寛政の改革(→p.204)で一時的にもち直すが、再び下がった。

(「大河内家記録」「向山誠斎雑記及雑綴」より作成)



をおさえる一方、大名から石高1万石について100石を臨時に上納させる**上げ米**を実施し、そのかわりに参勤交代の負担をゆるめた④。ついで、幕領の代官らの不正を徹底的に摘発する一方、検見法を改めて**免法**を広く取り入れ、年貢率の引上げをはかり、年貢の増徴を目指した。また、西日本の幕領で盛んになった綿作などの商品作物の生産に目をつけ、畑地からの年貢増収を目指した。さらに、商人資本の力を借りて**新田開発**を進め⑤、米の増産を奨励した。

これらの施策によって、幕領の石高は1割以上増加し、年貢収納高も増大した。「米公方」と呼ばれた吉宗は、さらに米価を安定させて武家の財政を保とうと、米価の平準化を目指して大坂の堂島米市場を公認した。また、甘藷⑥・さとうきび・樺・朝鮮人参の栽培など、新しい産業を奨励し、漢訳洋書の輸入制限をゆるめるなどした。

こうして財政再建の見通しを立てた吉宗は、1728(享保13)年4月に65年ぶりの日光社参(軍役)を命じ、東照権現(家康)の御定めを通りを主張して強い將軍像を誇示した。そのうえで、將軍側には「恥辱」と認識された上げ米を廃止し、参勤交代をもとに戻した。

改革の第2の柱は江戸の都市政策で、町奉行**大岡忠相**によって進められた。明暦の大火以後も繰り返し大火に見舞われた江戸に、広小路・火除地などの防火施設を設け、定火消を中心としてきた消防制度を強化するために、町方独自の**町火消**を組織させた。また、評定所に**目安箱**を設けて庶民の意見を聞き、それによって貧民を対象

④ 1722～30(享保7～15)年の9年間実施された。この間、参勤交代の在府期間は半減された。上げ米は年18万7000石におよび、これは幕府の年貢収入の1割以上に相当した。

Q▶ 近世後半における諸産業の発達は、米納年貢に依存してきた武士たちに、どのような影響をもたらしたのだろうか。

⑤ 幕府は江戸日本橋に新田開発についての高札を立て、有力商人の協力をうながした。この時期の新田開発のおもなものに、飯沼新田・紫雲寺湯新田・武蔵野新田・見沼代用水新田があげられる。

⑥ 青木昆陽(→p.198)を登用して救荒用の甘藷(サツマイモ)の普及を実現させた。

⑦ 江戸町方の町々を「いろは」47組(のちに48組)に編成した。町人足役(→p.171)による組織的な消防制度を始めたが、やがて唐人足による消防組織にかわった。



町火消 いろは47組のうち「へ・ら・ひ」組は音が悪いので、「百・千・万」組と改めた。

(「火消千組の図大絵馬」、なりたさんいこうかん、成田山靈光館蔵、千葉県)

とする医療施設として^{こいしかわやうじやうしよ}小石川養生所を設けた。

吉宗^{よしむね}政権の末期には、種々の国家制度を充実させていった。^{くじかた}公事方

^{おさだめがき}御定書を制定して、判例にもとづく合理的な司法判断を進めた。また、

1615^{げん な}(元和元)年以降の触れを類別に^{へんさん}編纂して『御触書寛保集成』をつ

くり、同時に以後の幕府の記録保存を命じた。御触書集成の編纂は、

以後も幕府事業として引き継がれた。また吉宗は、次男^{むねたけ}宗武と四男^{むね}宗

尹^{ただ}にそれぞれ^{た やす}田安家・一橋家^{ひとつばし}をおこさせ^①、朝廷との協調関係も維持して徳川将軍家の安定をはかった。

① 9代将軍徳川家重の次男^{いえしげ}重好^{しげ}に始まる清水家とあわせて、^{よし}三卿^{さんきやう}と呼ばれる。

社会の変容

^{きやうほう}享保の改革のあと、18世紀後半は幕藩体制にとつて大きな曲がり角となった。

② 零細農民を年季奉公人などとして使役しておこなう地主経営をいう。

村々では^{じめしてづくり}地主手作^②をおこなう一部の有力な^{ひやくしやう}百姓^{なぬし}が、^{しやう}庄屋^{しやう}などをつとめ、手持ちの資金を^{こんきやう}困窮した百姓に^{りがし}利貸し、村やその周辺から^{しち}質にとった田畑を集めて地主に成長し、これら田畑を^{こさくにん}小作人に貸して小作料を取り立てた。彼らは村々において商品作物生産や流通・金融の中心となり、地域社会を運営する担い手となった。こうした有力百姓を^{ごうのう}豪農と呼ぶ。一方、田畑を失った^{こびやくしやう}小百姓は小作人となるか、^{ねん き ほうこう}年季奉公^{p.186}や日用稼ぎに従事し、近隣の都市や江戸・大坂に流出するなど、いっそう貨幣経済に巻き込まれていった。こうして多くの村々では、自給自足的な社会のあり方が大きくかわり、村役人を兼ねる豪農と、小百姓らとのあいだの対立が深まった。そして村役人の不正を追及し、民主的で公正な村の運営を求める小百姓らの運動^{むらかた}(村方

Q▶ 18世紀後半以降、社会はどのように変容していったのだろうか。

騒動^{そうどう}が各地で頻発^{ひんぱつ}した。

都市社会の基礎である町もその性格を大きくかえた。とくに三都^{さん と}や城下町^{じょう か まち}の町人地中心部^{ちゅうしんぶ}では、町内の家持町人^{いえもち}が減少し、住民の多くは地借や店借^{じかり たながり}、また商家^{しょうか}の奉公人^{ほうこうにん}らによって占められた。そして町内の裏長屋^{うらながや}③や城下町^{じょうかまち}の場末^{で かせ}には、出稼ぎ^{で かせ}などで農村部^{→ p.171}から流入してきた人々や、棒手振^{ぼうてふり}・日用稼ぎ^{にちよう かせ}や賃仕事^{ちんしごと}④などの雑業^{ざつぎやう}に従事するその日稼ぎ^{れいさい}の貧しい民衆が多数居住した。これらの都市民衆は、零細な^{れいさい}棟割長屋^{むねわり}に住み、わずかな貨幣収入^{かへいしゅうに}で暮らしを支え、物価の上昇^きや飢饉^{きん}・災害の時には、たちまち生活を破壊された。

三都^{さん と}や長崎では、17世紀前半に幕府公認^{きうにん}の遊廓^{ゆうかく}⑤がつくられた。そこで働かされた多数の遊女^{ゆうにょ}たちは、貧しい百姓や都市下層民^{しやうさうじん}の出身者であった。また、多くの城下町^{じょうかまち}や門前町^{もんぜんまち}・宿場町^{しゆくばうち}・港町^{こうまち}などで、料理茶屋^{りやんちや}や旅籠屋^{はたごや}の中に類似の営業をおこなう者も多くいた。

一揆と打ちこわし

百姓^{ひやくしやう}は、村請制^{むらうけ}のもとで年貢や諸役など重い負担^{ふたん}を課せられたが、幕府や藩の支配が原因で、百姓の暮らしや生産活動が大きくそなわれた時には、村を単位に領主に対して広い範囲で結集し、要求を掲げてしばしば直接行動をおこした。これを百姓一揆^{ひやくしやういっぎ}⑥と呼ぶ。

17世紀後半からは、村々の代表者が百姓全体の要求をまとめて領主に直訴^{じきそ}する一揆^{だいひやうおつそがた}(代表越訴型一揆)⑦が増え、17世紀末になると、広い地域にわたる大規模な惣百姓一揆^{そうひやくしやういっぎ}⑧

も各地でみられるようになった。一揆に参加した百姓らは、年貢の増徴や新税の停止、藩による専売制の撤廃などを要求し、藩の政策に協力する御用商人や村役人の家を打ちこわす



裏店^{うらだな}とも呼ばれ、「九尺二間^{くしやくにま}」(間口2.7m×奥行3.6mほどの狭い借家のこと)といわれるように、狭くて劣悪な住居が大半であった(→p.171)。

④女性が家におこなう賃金稼ぎのこと。洗濯・裁縫・髪結・加工など様々であった。

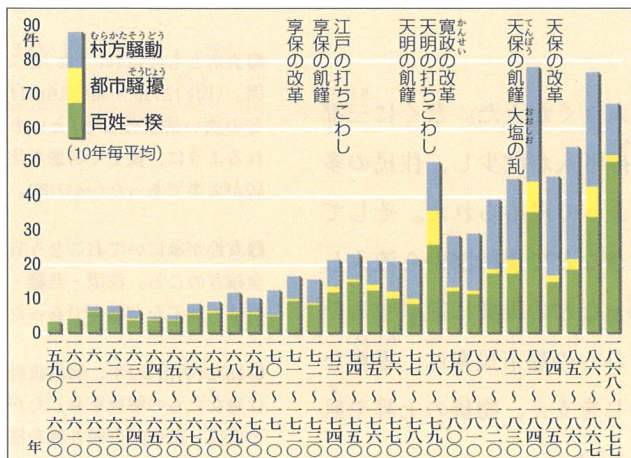
⑤1872(明治5)年、明治政府は遊女たちの解放を命じたが、その後、遊廓は全国各地や植民地にもつくられ、国内では1956(昭和31)年の売春防止法まで存続した。

⑥17世紀の初めには、幕府の支配に抵抗する土豪(兵農分離の際に、村にとどまった有力な旧侍層)をまじえた武力蜂起や村ぐるみでの逃散など、まだ中世の一揆のなごりがみられた。百姓一揆は、明治初期のものを含めて、これまで3700件ほどが確認されている。

⑦下総の佐倉惣五郎^{しもうさくさくら惣ごろう}、上野の礪波^{うきは}茂左衛門^{もさえもん}のように、一揆の代表者が義民として伝説化することが多かった。

⑧藩領全域におよぶ場合は、全藩一揆と呼ぶ。たとえば、1686(貞享3)年の信濃松本藩の嘉助騒動^{けすけそうどう}、1738(元文3)年の陸奥磐城平藩の元文一揆^{げんぶんいっぎ}があげられる。

百姓一揆勢の「大より」(大集会)1840(天保11)年、庄内藩でおこった「三方領知替え」反対一揆(→p.210注④)を描く。領内数万の百姓が村ごとに集まり、幕府による領主の移転強制に反対し、これを撤回させた。『夢の浮橋』、部分、致道博物館蔵、山形県)



百姓一揆の推移(青木虹二『百姓一揆総合年表』より作成)



天明の飢饉 1782～87(天明2～7)年、長雨と浅間山噴火・冷害などによって、全国的に大飢饉となった。
(「天明飢饉之図」、部分、福島県会津美里町教育委員会蔵)

などの実行使にも出た。

幕府や諸藩は一揆の要求を一部認めることもあったが、多くは武力で鎮圧し、一揆の指導者を処刑するなどした。しかし、きびしい弾圧にもかかわらず、百姓一揆は増加し続け、凶作や飢饉の時には、各地で同時に多発した。そして、1732(享保17)年には、天候不順の西日本一帯でいなごやうんかが大量に発生し、稲を食いつくして大凶作となり、全国におよぶ飢饉となった(享保の飢饉)。このため民衆の暮らしは大きな打撃を受け、江戸町人地の中心部では翌1733(享保18)年に、有力な米問屋が米価急騰の原因をつくったとして**打ちこわし**、**貧民が米の安売りを要求するなどの目的で金融業者や米商人などを襲い、家屋や家材を破壊した行動**。あった。

1782(天明2)年の冷害から始まった飢饉は、翌年の浅間山大噴火を経て数年におよぶ大飢饉となり、東北地方を中心に多数の餓死者を出した(**天明の飢饉**)^①。こうした中で全国で数多くの百姓一揆がおり、江戸や大坂をはじめ各地の都市では激しい打ちこわしが発生した。

田沼時代

将軍徳川吉宗のあと、9代将軍家重を経て10代将軍家治の時代になると、1772(安永元)年に側用人から老中となった**田沼意次**が十数年間にわたり実権を握った。この時代を**重商主義的政策を積極的に展開した**。田沼時代という。意次は再び行き詰まりだした幕府財政を再建するために、年貢増徴だけに頼らず民間の経済活動を活発にし、そこで生ま

Q▶ 一揆や打ちこわしに参加した人々は、何を目的としたのだろうか。

① 被害はとくに陸奥の諸藩でひどく、津軽藩などでは餓死者が十数万人にも達し、消滅する村も多かった。

Q▶ これまでの政策と比べて、田沼時代の政策には、どのような特徴があるだろうか。



長崎貿易 長崎の役人とオランダ商館員とが、商品を計量する様子がみえる。(『蘭館絵巻』、部分、長崎歴史文化博物館蔵)



南鐐二朱銀の表(左)と裏面(右) 8片をもって小判1両に引きかえると明示してある。(日本銀行金融研究所貨幣博物館蔵)

れた富の一部を財源に取り込もうとした。そのために、都市や農村の商人・職人の仲間を^{かぶなかつ}株仲間として広く公認し^{うんじょう みやうが}、運上や冥加などの営業税の増収を目指した。また、はじめて定額の計数銀貨を鑄造させ^{ちゆうぞう}、金を中心とする貨幣制度への一本化を試みた。

- 5 さらに意次は、江戸や大坂の商人の力を借りて^{いんぼ}印旛沼・^{てが}手沼の大規模な^{かんたく}干拓工事^{しんでん}を始めなど、新田開発を積極的に試みた。また仙台藩の医師^{くどうへいすけ}工藤平助^{あかえ ぞうふせつこう}の意見書『赤蝦夷風説考』を取り入れ、^{も がみとくない}最上徳内^{1734 ~ 1800}らを蝦夷地に派遣して、その開発やロシア人との交易の可能性を調査させた^{え ぞ ち}。意次の政策は、商人の力を利用しながら、幕府財政を改善しようとするものであり、これに刺激を受けて、民間の学問・文化・芸術が多様な発展をとげた。一方で、幕府役人のあいだで^{わいろ えんこ}賄賂や縁故による人事が横行するなど、武士の気風を退廃させたとする批判が強まった。

- 15 朝廷では、1758(宝暦8)年に復古派の公家たちと^{たけのうちしき ぶ}竹内式部が、関白・^{ばく ぶ けてんそう}武家伝奏らを軽んじたとして処分される^{ほうれき}宝暦事件^{1712 ~ 67}がおこった。また1779(安永8)年、^{あんえい}後桃園天皇の急死後、^{ご ももぞの}閑院宮家から迎えられた^{かんいんのみや}光格天皇^{1770 ~ 79}が即位した。^{こうかく}位 1779 ~ 1817

- 20 天明の飢饉が始まり、百姓一揆や打ちこわしが全国で頻発する中、1784(天明4)年に意次の子で若年寄の^{わかしより た めまおきとも}田沼意知^{1749 ~ 84}が江戸城内で刺殺されると⁶、意次の勢力は急速に衰え、1786(天明6)年、將軍家治が死去するとすぐに老中を罷免されて、多くの政策も中止となった。

❶ 田沼意次は、なぜ金を中心とする貨幣制度への一本化をはかったのだろうか。

❷ この一環として幕府の専売のもとに、銅座・真鍮座・朝鮮人参座などが設けられた。

❸ 1772(安永元)年から大量に鑄造された^{なんりょうに しゅうぎん}南鐐二朱銀^{にんじんに}がその代表である。南鐐とは上質な銀のことであるが、金2朱として通用した。

❹ 工事はほぼ完成に近づいたが、利根川の大洪水で挫折した。

❺ 長崎貿易(→p.162、179)の政策も転換し、銅や俵物を輸出して貨幣鑄造のための金・銀の輸入をはかった。

❻ 意知を刺殺した旗本の佐野^{はたとと}政言^{まさこと}は、民衆から「世直し大明神」ともてはやされた。

Q▶ 元禄文化と宝暦・天明期の文化の背景には、どのような違いがあるだろうか。

2 宝暦・天明期の文化

宝暦・天明期の文化

① 西川如見は『華夷通商考』(1695年)を著した。白石は、1708(宝永5)年に屋久島に潜入し捕えられて江戸小石川に幽閉されたイタリア人宣教師ヨハン＝シドッチへの尋問で得た知識をもとに、『采覧異言』と『西洋紀聞』を著した。

② 医学では、元・明の医学を重んじる当時の流れに対し、臨床実験を重視する漢代の医学に戻ろうとする古医方が現れた。とくに山陽東洋は、18世紀中頃、刑死人の解剖をおこなわせて人体内部を直接観察し、日本最初の解剖図録『蔵志』を著した。

③ 大槻玄沢は『蘭学階梯』という蘭学の入門書を著し、江戸に芝蘭堂を開いて多くの門人を育てた。宇田川玄埴は、西洋の内科書を訳して『西説内科撰要』を著した。

④ 平賀源内は高松藩の足軽の家に生まれ、長崎でオランダ人・中国人とまじわり本草学を研究した。のちに江戸へ出て摩擦発電器(エレキテル)の実験をし、寒暖計や不燃性の布などをつくって人々を驚かせた。戯曲や滑稽本も書き、博学多才の人であった。また蘭学書によって西洋画法を学び、秋田藩に銅山開発のためにまねかれた際に、その技法を伝えた。

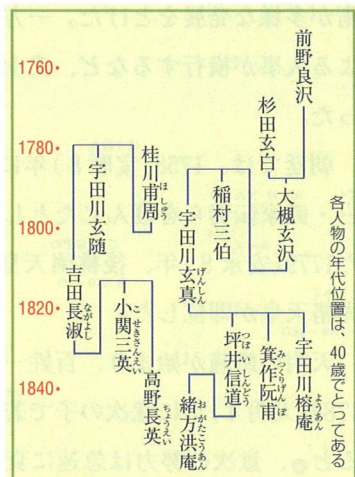
Q▶ 洋学とともに国学が発展した社会的背景は何だろうか。

18世紀半ば、商品経済の発展により、富を蓄えた裕福な百姓や都市の町人、都市生活者となった武家の中から、学問や思想、芸術など、幅広い分野で文化の担い手が数多く現れた。また、寺子屋などが各地につくられ、民衆の中にも識字層が大幅に増加し、読書をする人々が全国に広がり、書籍や印刷物が多様に制作・出版され、ものや人々の移動とともに、様々な情報や文化が流通した。こうして、幕藩体制の矛盾が深まる中で、幕府政治のあり方を批判する思想や、近代的な合理主義が生まれた。

洋学の始まり

学問・思想の分野では、18世紀になると、幕藩体制の動揺という現実を直視してこれを批判し、古い体制から脱しようとする動きがいくつも生まれた。いわゆる鎖国のもとにおかれたことから、西洋の学術・知識の吸収や研究は困難であったが、18世紀の初めに天文学者である西川如見や新井白石が世界の地理・物産・民俗などを説いて、先駆けとなった①。また将軍徳川吉宗が、漢訳洋書の輸入制限をゆるめ、青木昆陽・野呂元丈らにオランダ語を学ばせたこともあって、洋学はまず蘭学として発達した。

洋学をいち早く取り入れたのは、実学(実用の学問)としての医学である②。1774(安永3)年、前野良沢や杉田玄白らが西洋医学の解剖書を訳述した『解体新書』は、その大きな画期となった。ついで大槻玄沢や宇田川玄埴③が出て、洋学は各分野でいっそう盛んとなり、玄沢の門人稲村三伯は蘭日辞書である『ハルマ和訳』をつくった。また平賀源内は、長崎で学んだ科学の知識をもとに物



洋学者系統図

理学の研究を進めた⁴。

また、ロシアの南下をきっかけとして、世界や日本の地理や地図を学び研究することが本格的に始まった。こうして洋学は、多くの分野にわたり、実証的で科学的な研究や学問の発達を大きくうながした。

国学の発達と尊王論

日本の古典をめぐる実証研究は、元禄時代^{げんろく}に契沖^{けいちゆう}らによって始められ、18世紀に入ると『古事記』や『日本書紀』などの研究に進み、日本古来の道(古道)を説く国学として発達した。

荷田春満^{かだのあすまろ}や門人の賀茂真淵^{かもまぶち}は日本の古代思想を追究し、洋学はもとより、儒教・仏教も外来思想として排した。

伊勢商人の家に生まれた本居宣長^{もとのおりのなが}は、真淵に学びながら国学を思想的にも高めて『古事記伝』を著し、日本古来の精神に返ることを主張して、

「漢意」^{からごころ}を激しく攻撃した。古い教理から抜け出ることができなかった儒学に対し、国学では、

政治や社会への批判精神が強かった。また盲目の国学者 塙保己一^{はなわ ほ けいち}は、古典の収集・保存につとめ、

のちの国史学・国文学の基礎を築いた⁶。

尊王論^{そんのうちん}は儒学と結びつき、幕藩体制の中の天皇を王者として尊ぶ思想として、水戸学^{みとがく}などで主張された。そして18世紀半ばに竹内式部^{たけのうしき}は京都で公家たちに尊王論を説いて追放刑となり(宝暦事件)^{→ p.197}、

また兵学者の山県大式^{やまがただい}は、江戸で幕政の腐敗を攻撃したため、謀反を企てたとして死刑に

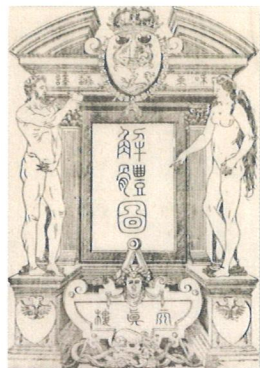
処せられた(明和事件)¹⁷⁶⁷。しかし尊王論自体は、將軍が天皇の委任によって政権を預かるというとな

え方で、朝廷を尊ぶことにより幕府の権威を守ろうとするものが多かった⁸。

生活から生まれた思想

18世紀の初め、京都の町人石田梅岩^{いしばいがん}は心学^{しんがく}をおこし、儒教道徳に仏教や神道の教えを加味して、町人を中心とする庶民の生活倫理をやさしく説いた

(石門心学)。社会の中での町人や百姓の役割を強調し、その人間としての価値を説く教えは、弟子の手島堵庵^{てしまとあん}・中沢道二^{なかざわどうに}らによって全国に



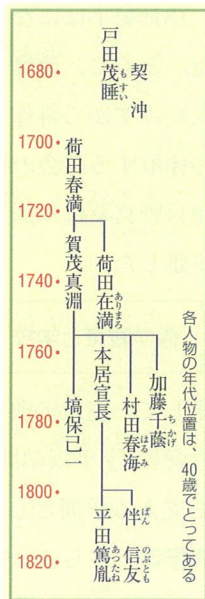
『解体新書』 原書はドイツ(プロイセン)の医学者ヨハン=アダム=クルムスの著書で、1722年に出版された。そのオランダ語訳『ターヘル=アナトミア』(1734年)を翻訳したものである。図は屏絵。屏絵や解剖図は、平賀源内に絵を学んだ秋田藩士で秋田蘭画(→p.203)の創始者である小田野直武が写し描いた。(学習院大学史料館蔵)

⁵ 漢籍を学び、中国の文化に深く傾倒する精神。

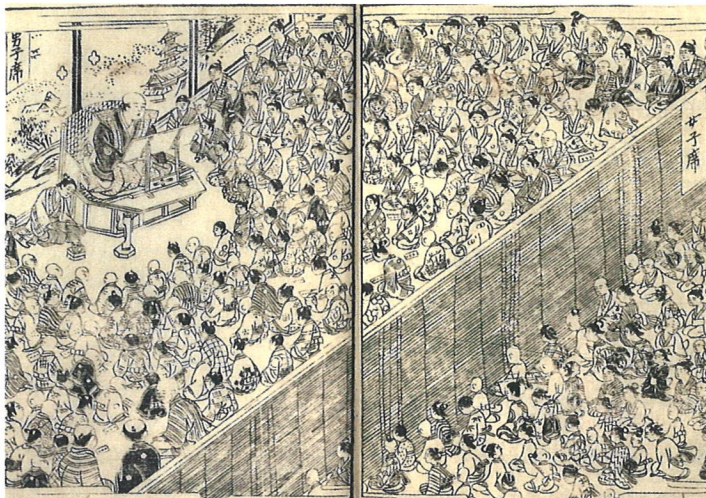
⁶ 塙保己一は18世紀末に幕府の援助を受けて和学講談所を設け、『群書類従』などの編纂と刊行をおこなった。

⁷ 水戸藩の『大日本史』の編纂事業を中心にしておこった学派で、朱子学を軸に国学・神道を総合し、天皇尊崇と封建的秩序の確立を説いた。前期の水戸学では、徳をもっておさめる王者は力をもって支配する覇者にまさるといふ朱子学の大義名分論からの「尊王斥覇」の考えが主流であった。

⁸ 寛政期の高山彦九郎は尊王思想を説いて全国をめぐり、蒲生君平や頼山陽らもその著述を通して尊王論を説いた。実際に政務委任を受けた將軍は、1863(文久3)年の徳川家茂が最初である。



国学者系統図



心学道話をきく子どもたち
18世紀の後半、京都の心学講舎で師匠の話にきき入る子どもたち。人として生きるための道徳や礼儀をやさしく説く道話に、大勢で正座して耳を傾ける。「男子席」「女子席」が簾で区切られている。
(『前訓』、明倫舎蔵、京都府)

Q▶ 身分社会への批判はどのようにして生まれたのだろうか。

Q▶ 読み書きの能力が高くなったことで、文化にはどのような変化が生まれたのだろうか。

① 2人は合理主義・実証主義の立場から、これまでの儒教・仏教の思想を鋭く批判した。仲基は『出定後語』(1745年)で仏教思想の形成を実証的・歴史的に論じ、また、蟠桃は『夢の代』(1820年完成)で西洋文明を高く評価し、地動説や無神論(無鬼論)を説いた。

身分社会への批判
おのれの
各耕シテ子ヲ育テ、子壯ニナリ、能ク耕シテ親ヲ養ヒ子ヲ育テ、一人之ヲ為レバ万人之ヲ為テ、貪リ取ル者無レバ貪ラルル者モ無ク、転定①モ人倫モ別ツコト無ク、転定生ズレバ、人倫耕シ、此ノ外一点私事無シ。是レ自然ノ世ノ有様ナリ。
(『自然真営道』)
① 天地の意だが、転は運回する天。定は静止する海で、海の中央に土(陸地)があるとすると。転と定が一体として活動し、万物を生成すると考える。

広められた。

18世紀半ばになると身分社会を根本から改めようとする思想が現れた。とくに、陸奥八戸の医者安藤昌益^{あんどうしょうえき}は『自然真営道』^{しぜんしんえいどう}を著して、万人がみずから耕作して生活する自然の世を理想とし、武士が百姓から搾取する社会の仕組みや身分制度を鋭く批判した。また工藤平助の娘只野真葛は、国学の儒学批判にも学びながら、男女の才知の平等を主張した。

儒学教育と学校

学問・思想におけるこうした新たな動きに対し、幕府は儒学による武士の教育を強く奨励した。そして、寛政の改革で幕府は朱子学を正学とし、林家の家塾^{りんけ かじゅく}を幕府直営の昌平坂学問所とし、人材を整えて、幕府による支配の正統性を支える学問とした。また18世紀後半には諸学派の折衷を試みる折衷学派、さらには実証的な研究を重視する考証学派^{こうしやう}が盛んになった。

全国の藩は、藩士や子弟の教育のために藩校(藩学)を設立した。藩校は、初め朱子学を主とする儒学や武術を学ばせるものがほとんどであったが、のちに蘭学や国学も取り入れ、年齢や学力に応じた学級制もみられた。また藩の援助を受けて、藩士や庶民の教育を目指す郷校(郷学)がつくられることもあった。17世紀後半、岡山藩主池田光政が閑谷村に建てた閑谷学校は、その早い例である。また大坂の懷徳堂^{かいとくどう}は、

18世紀前半に大坂町人の出資を得て設立され、寛政の改革の頃には中井竹山^{ちくざん}を学主として朱子学や陽明学を町人に教え、富永仲基^{とみながなかと}や山片蟠桃^{やまがたはん}が

とう
桃①ら多くの町人学者を生んだ。

民間でも、武士・学者・町人により各地で私塾が開かれ、儒学や国学・蘭学などが講義された。儒学では、17世紀後半の伊藤仁斎^{じんさい}による古義堂^{こぎどう}(京都)や18世紀前半に荻生徂徠^{おぎゅうそらい}が始めた護国塾^{けんこくじゅく}(江戸)、また18世紀後半には国学の^{もとおり}のりなが^{すずのや}鈴屋^{いせまつさか}(伊勢松阪)、さらに蘭学では大槻玄沢^{おおつきげんたく}の芝蘭堂^{しらんどう}(江戸)などが開かれた。

一般庶民^{しよみん}の初等教育では、都市や村々を問わずおびただしい数の寺子屋^{てらこや}がつくられた。寺子屋^{てらこや}は、村役人・僧侶・神職・富裕な町人などによって運営され、師匠^{ししょう}(教師)が、出版された教科書を用いて、読み・書き・そろばんなどの日常生活に役立つことや、幕府の法、道德などを教えた。寺子屋の師匠には浪人の武士や女性もいた。

貝原益軒^{かいばらえきけん}の著作をもとにつくられた、女性の心得を説く『女大学』^{おんなだいがく}などを教科書として、女子教育も進められた。これらの庶民教育は、近世後期における民衆文化の発展にも大きく寄与した。

文学と芸能

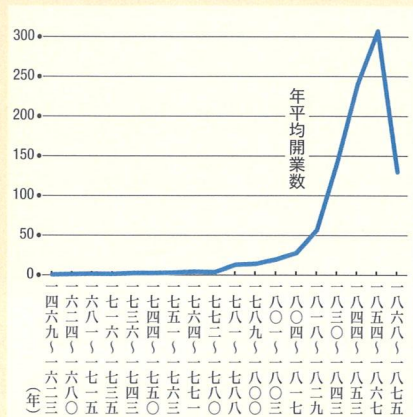
江戸時代中期の文学は、身近な政治や社会のできごとを題材とし、出版物や貸本屋の普及もあって、広く民衆に受け入れられた。

小説では、浮世草子^{うきよぞうし}が衰えたあと、挿絵で読者を引きつける草双紙^{くさそうし}や、江戸の遊里^{ゆうり}を描く洒落本^{しゃれほん}が流行した。また、黄表紙^{きびょう}と呼ばれる風刺のきいた絵入りの小説もさかんに売り出された。洒落本や黄表紙は寛政の改革できびしく取り締まられ、代表的作家である山東京伝^{さんとうきやうでん}が処罰された。

一方、大坂の上田秋成^{あきなり}の『雨月物語』^{うげつ}のように、文を主とする読本^{よみほん}も現れた。俳諧では文人画家でもある与謝蕪村^{よ ぶ せん}が絵と一体になる句^くをよんだ。また柄井川柳^{からい せんりゅう}は、俳句の形式を借りて世相や風俗を風刺する川柳^{せんりゅう}を文学の一分野として定着させた。一方、大田南畝^{おおた なんぽ}(蜀山人^{しよくさんじん})・石川雅望^{いし かつ まさもち}(宿屋飯盛^{やどやのめしもり})を代表的作者とする狂歌^{きやうか}もさかんにつくられ、その中には為政者を鋭く風刺したり、世相を

読みといてみよう

江戸時代後期の寺子屋の数の変化と経済や文化との関連について、考えてみよう。



寺子屋の開業数(『国史大辞典』より作成)

耕書堂^{こうしやどう} 塙屋重三郎^{つた や じゅうざぶろう}は本屋である耕書堂を経営し、恋川春町の黄表紙、山東京伝の洒落本などの作品や喜多川歌麿・東洲斎写楽の絵を刊行した。1791(寛政3)年、山東京伝の洒落本出版で財産の半分を没収された。

(『画本東都遊』、国立国会図書館蔵)



読みといて みよう

ここにあげた
川柳と狂歌が
よまれた背景
を説明してみ
よう。

狂歌
歌よみは下手こそよけれ天地の
動き出してたまるものは
世わたり春の野に出て若菜つむ
わが衣手の雪も恥かし
(宿屋飯盛)
(蜀山人)

川柳
『誹風柳多留』
侍が来ては買つてく高楊枝
役人の子はにぎにぎを能く覚え
芭蕉翁ばちやんと云ふと立ちどまり
五右衛門はなまにえの時一首よみ
かみなりをまねて腹掛やつとさせ

ひにく
皮肉るものもみられた。

浄瑠璃では、18世紀前半に
竹田出雲(2世)が、また天明期
(1781~89年)の頃に近松半二が
出て、すぐれた作品を残した。
歌舞伎は、18世紀後半から江戸
を中心に隆盛を誇り、寛政期
(1789~1801年)には中村・市

Q 錦絵が広く受け入れら
れ、人気を博した背景は何
だろうか。

三十六歌仙「僧正遍昭」摘
んだばかりの綿から綿繰り車
を用いて種をとり、籠で運ぶ
女性の労働を描く。鈴木春信
の1767~68年頃の作品。上
に「たらちねは かゝれとて
しも むば玉の 我くろかみ
は なですやありけん」とあ
る。(鈴木春信筆、メトロポリタン
美術館蔵)



絵画

17世紀末に菱川師宣によって創始された浮世絵は、絵本
や挿絵として描かれたが、18世紀半ばに鈴木春信が1枚
刷りの多色刷浮世絵版画(錦絵)として完成させた。そして、版画の
製作技術や出版業の発達とともに、浮世絵の黄金時代へと向かった。
寛政期に、多くの美人画を描いた喜多川歌麿や、個性豊かに役者絵・
相撲絵を描いた東洲斎写楽らが、大首絵の手法を駆使してすぐれた

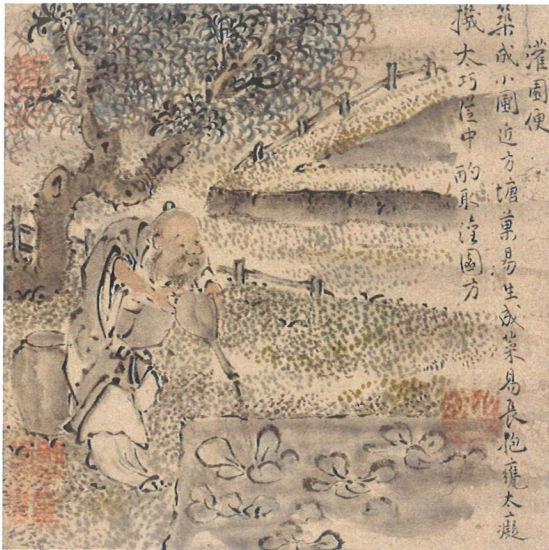


扇屋内蓬萊仙 喜多川歌麿が
描く美人画。江戸新吉原の遊女
屋扇屋に抱えられた散茶の遊女。
艶やかな身なりの裏に、遊廓の
非人間的な現実がのぞかれる。
(喜多川歌麿筆、東京国立博物館蔵)

初代尾上松助の松下造酒之進
1794(寛政6)年上演の「敵討兼合
話」で、零落した病気の浪人役を
演ずる様子を描く。

(東洲斎写楽筆、東京国立博物館蔵)





作品をつぎつぎに生み出した。

伝統的な絵画では、**円山応挙**^{まるやまおうきよ 1733～95}に始まる円山派が写生を重んじ、遠近法を取り入れた立体感のある作品を描いた。また明や清の影響を受けた画風もおこり、文人画とも呼ばれて一部の知識人に好まれた。18世紀後半の**池大雅**^{いけのたいが 1723～76}や与謝蕪村がこの画風を大成した^①。

西洋画は、近世の初めに南蛮人によってもたらされたのち途絶えていたが、蘭学の隆盛につれて油絵の具などとともに絵画の技法が長崎を通して伝えられた。18世紀後半、平賀源内の影響を受け、西洋画が広がった。江戸で銅版画を始めた**司馬江漢**^{し ぼ こうかん 1747～1818}、銅版画や油絵を描いた**陸奥須賀川**^{む つ す か がわ 1748～1822}の**亜欧堂田善**^{あ お う どう てん ぜん 1748～1822}、秋田で独自の洋風画(秋田蘭画)を創始した**小田野直武**^{お の の なお たけ 1749～80}らが知られる。

白河藩主松平定信に仕え、谷文晁に学んだのち、西洋画や銅版画に転向した。「浅間山図屏風」などを描いた。

『十便十宜図』より「灌園便」^{かん えん べん}

(池大雅筆)と「宣秋」(与謝蕪村筆)^が
池大雅・与謝蕪村競作の画帖から。清の李漁の漢詩を素材に描く。老人が野菜に水をやる「灌園便」と、重陽の節句(9月9日)を祝う「宣秋」。

(各縦17.7 cm、横17.7 cm、川端 康成 記念会蔵、神奈川県)

① 文人画とは専門の画家でない文人・学者が描いた絵のことで、中国の南画が文人・学者によって描かれることが多かったため、日本でも同じ意味に用いられた。池大雅と与謝蕪村の合作である『十便十宜図』はとくに有名である。

3 幕府の衰退と近代への道

寛政の改革

欧米では17世紀中頃にイギリス革命が、18世紀後半にはアメリカ独立革命、つづいてフランス革命がおこった。また、ロシアはシベリア開発に意欲をもちはじめ、19世紀になるとアメリカも西部開拓を進めて太平洋に進出するなど、世界情勢は大きく近代に向けて動きだしていた。このような情勢の中でロシア船やイギリス船・アメリカ船が日本近海に現れるようになり、幕府は

→ p.206

外交政策を見直す必要にせまられた。

田沼意次が退いた翌1787(天明7)年5月、江戸・大坂など全国30余りの主要都市で打ちこわしがあいついであった(天明の打ちこわし)。

なかでも江戸の打ちこわしは激しいもので、市中の米屋などが多数襲われ、幕府に強い衝撃を与えた。こうした中で、11代将軍徳川家斉の補佐として老中に就任したのが、白河藩主松平定信^{1738~1829}である。

定信は国内外の危機がせまるのを感じて田沼時代の政策を改め、幕政の改革に着手した。飢饉で危機におちいった農村を復興することによって幕府の財政基盤を復旧し、打ちこわしを受けた江戸の治安問題を解決し、ロシアを中心とする外国勢力に対応するための諸政策を実行していった。これら定信による改革政治を寛政の改革と呼ぶ。

まず荒廃した村々を復興させようと、人口減少の著しい陸奥や北関東などで百姓の他国への出稼ぎを制限し、荒れた耕地を復旧させるため、全国で公金の貸付をおこなった。また飢饉に備えて、各地に社倉・義倉をつくらせて米穀を蓄えさせた(困米)。

打ちこわしに見舞われた江戸では、両替商を中心とする豪商が幕府に登用され、その力を利用して都市政策が進められた。まず米をはじめ物価の調節をはかってその引下げを命じ、ついで正業をもたない者に資金を与えて農村に帰ることを奨励した(旧里帰農令)。さらに治安対策として住民の把握(人別改め)を強めるとともに石川島に人足寄場を設け、無宿人を強制的に収容し、技術を身につけさせて職業をもたせようと試みた。また町々に町費節約を命じ、節約分の7割を積み立てさせ(七分積金)、新たに設けた江戸町会所によってこれを運用させて、米・金を蓄え、飢饉・災害時に困窮した貧民を救済する体制を整えた。

一方、改革を進める幕府役人や幕領代官などを担う旗本・御家人たちの生活安定のために、定信は棄捐令を出して札差に貸金を放棄させた²。そのうえで旗本に武芸奨励を命じ、ついで寛政異学の禁を発した。朱子学を正学とし、1790(寛

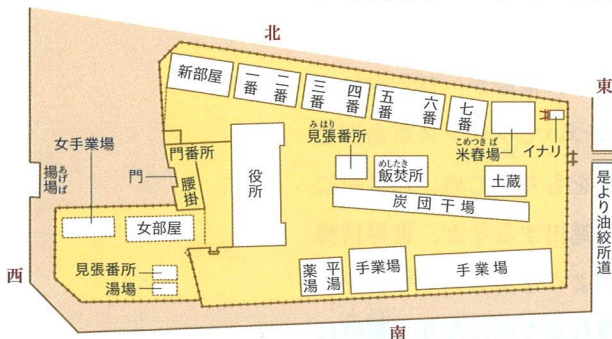
①松平定信は、田安宗武の子で将軍吉宗の孫に当たる。引退後、随筆『花月草紙』や自伝『宇下人言』などを著すなど、深い教養をもつ。

Q> 寛政の改革における農村・都市・学問への対応は、それぞれどのようにおこなわれたのだろうか。

②旗本たちの以後の生活資金のために、貸金会所を設けて低利貸付をおこなった。

人足寄場 役人の詰める役所や番所があるほかに、男女の無宿人の生活する場所(風呂など)が設けられていた。無宿たちは炭団・蛤粉(石灰)の製造や油絞りのほか、紙漉・鍛冶・大工・左官・髪結などの手業を身につけた。

(『大日本近世史料 市中取締類集27』より作成)





聖堂学問所での講義 湯島聖堂付
属の学問所では、毎月、定期的に
儒員講経(御座敷講釈)がおこなわ
れ、直参を中心とする武士たちが
受講した。

(「聖堂講 釈 図」、模写、東京大学史料 編
纂 所蔵)

政2)年には湯島聖堂の学問所で朱子学以外(異学)の講義や研究を禁
じ、學術試験をおこなって人材登用につなげた。林家当主に人材が得
られなかったことから、儒者に柴野栗山・尾藤二洲・岡田寒泉を任
じた③。

5 民間に対してはきびしい出版統制令を出して、政治への風刺や批判
をおさえ、風俗の刷新もはかった。林子平が『三国通覧図説』や『海国
兵談』で海岸防備を説いたことを幕政への批判とみて弾圧し、洒落本
や黄表紙が風俗を乱すとして出版を禁じ、その出版元を処罰した④。
農村でも芝居を禁じるなど風俗取締りが命じられた。

10 寛政の改革は、一時的に幕政を引き締め、幕府の権威を高めるかに
みえたが、きびしい統制や倏約令は民衆の反発をまねいた。さらに、
朝廷との問題が発生した。1789(寛政元)年、朝廷は光格天皇の実父で
ある閑院宮敦仁親王に、太上天皇(上皇)の尊号を宣下したいと幕
府に同意を求めたが、定信はこれを拒否した⑤。武家伝奏ら公家は再

15 び尊号宣下を求めたが、定信
は本来武家伝奏は幕府側に立
つべきとして、1793(寛政5)
年に武家伝奏らを処分した。
この一連の事件を「尊号一件」
と呼ぶ。この事件の対処をめ
ぐる將軍徳川家斉との対立⑥
もあって、定信は老中在職6
年余りで退陣に追い込まれた。
幕府による朝廷統制機構は幕

③ この3人を「寛政の三博士」
という。その後、岡田寒泉は
代官に転任し、そののちに古
賀清里が任ぜられた。学問所
は7年後に官立に改められ、
昌平坂学問所と呼ばれた。

④ 洒落本作者の山東京伝、
黄表紙作者の窓川春町、出版
元の蔦屋重三郎らが弾圧さ
れた。

⑤ 天皇に即位していない親王
を上皇と呼ぶことはできない
というのが理由であった。

⑥ またこの頃、家斉の実父
一橋治済を大御所(前將軍の
称)として江戸城西ノ丸に入
れる件で、家斉と定信は対立
していた。

海防論

当世の俗習①にて、異国船の入津②ハ長
崎に限たる事にて、別の浦え船を寄ル事ハ
決して成らざる事ト思リ。……當時③長崎
に嚴重に石火矢④の備有て、却て安房・
相模の海港に其備なし。此事甚不審⑤。細力
に思へば江戸の日本橋より唐⑥、阿蘭陀迄境
なしの水路也。然ルを此に備ずして長崎にの
ミ備ルは何ぞや。

(「海国兵談」)

①世間一般の習慣。②入港。③現在。④大砲のこと。
⑤中国のことで、当時は清。

寛政の改革への風刺

世の中に蚊ほどうるさきものはなし
ぶんぶといふて夜もねられず①
白河の清きに魚のすみかねて
もとの濁りの田沼こひしき②

①数のぶんぶんという羽音と、文武奨励とをか
けている。②白河藩主松平定信の清らかな政治と、
田沼時代のこった政治をかけている。

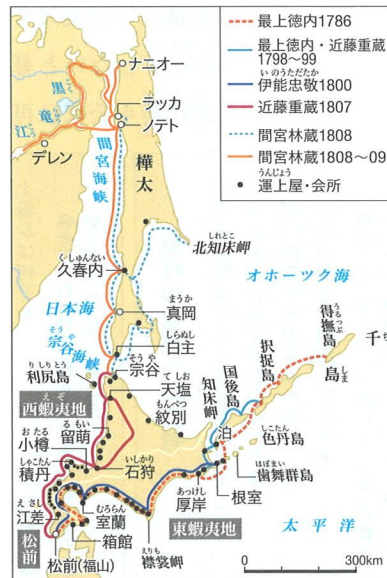
まつ
末まで維持されるものの、この事件を契機にして、幕府と朝廷の協調
関係は崩れ、天皇の権威は幕末に向かって浮上しはじめた。

幕府と同様に諸藩でも、田畑の荒廃^{ねんぐ}や年貢収入の減少により、財政
危機が生じていた。このため寛政年間(1789~1801年)を中心に、藩主
みずから指揮して綱紀を引き締め、領内での統制や倭約を強め、財政
難を克服して藩権力の復興を目指す藩政改革が広くおこなわれた。そ
こでは、農村の復興がはかられ、特産物生産が奨励されて藩の専売制^{せんばいせい}
が進められた。また、藩校^{はんこう}を設立して人材の登用に力が注がれた。改
革に成果を上げた熊本藩の細川重賢^{ほそかわしげかた}、米沢藩の上杉治憲^{うえすぎはるのり}、秋田藩の佐
竹義和^{たけよしまさ}らは名君とされた。

鎖国の動揺

まつだいらさだのぶ
松平定信の解決すべきもう1つの課題として、ロ
シアを中心とする外国からの危機への対応があった。

1789(寛政元)年、国後島のアイヌが蜂起して松前藩に鎮圧されたが、
幕府はアイヌとロシアの連携の可能性を危惧した。このようにロシア
に警戒心を抱いていたところに、1792(寛政4)年、ロシア使節^{Laksman}ラクス
マン^{1766~96?}が根室^{ねむろ}に来航し、日本人漂流民^{ひょうりゅうみん}①を届けるとともに通商を求め
た。その際、江戸湾入航を要求されたことが契機となって、幕府は江
戸湾と蝦夷地の海防の強化を諸藩に命じた。



北方探査関係図

この頃、ロシア人は択捉島^{えとろふとう}に上
陸して現地のアイヌと交易をおこ
なっていた。そこで1798(寛政10)
年、幕府は近藤重蔵^{じゅうそう}・最上徳内^{もがみとくない}
らに択捉島を探査させて「大日本
恵登呂府」の標柱を立てさせた。
その外側に異国ロシアとの境界線
を引く発想であった。こうして
1800(寛政12)年に幕府は、八王子
千人同心100人を蝦夷地に入植さ
せたうえ、1802(享和2)年には、
東蝦夷地を永久の直轄地とし、居
住しているアイヌを和人とした②。

Q 幕府が蝦夷地の探検に
力を入れ、やがて直轄地と
して居住のアイヌを和人と
したのはなぜだろうか。

①伊勢の船頭であった大黒屋
光太夫は、嵐で漂流し、アリ
ューシャン列島に漂着した。
その地でロシア人に救われ、
ロシアの首都ペテルブルクで
女性皇帝エカチェリーナ2世
に謁見したのち、送還された。
光太夫の見聞をもとに桂川
甫周は『北緯聞略』を著した。

②名前を和人風に改めさせ、
和人同様の風俗を強制し、首
長を名主に任命する、同化政
策を始めた。

1804(文化元)年には

ロシア使節^{Rezanov}レザノフが、
1764?~1807

ラクスマンのもち帰っ

た入港許可証をもって

長崎に来航したが、幕

府はこの正式使節に冷

淡な対応をして追い返

したため、のちにロシ

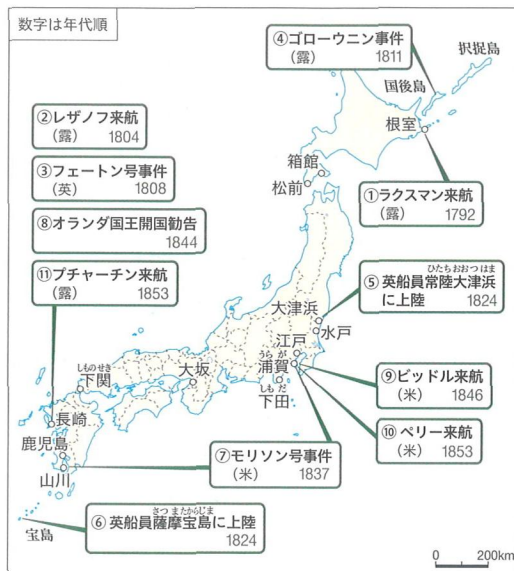
ア軍艦が樺太や択捉島

を攻撃した。異国との

銃撃戦は未曾有のこと

で、幕府の衝撃は大き

列強の接近関係図



③会津藩の場合は、藩兵を派遣して蝦夷地の海岸で銃隊訓練をしたり、台場を設けて大砲の射撃訓練をおこなったりしてロシアの攻撃に備えた。

④1811(文化8)年、国後島に上陸したロシア軍艦の艦長ゴローニンが、日本の警備兵に捕らえられて箱館・松前に監禁された。これに対してロシア側は翌年、択捉航路を開拓した淡路の商人高田屋嘉兵衛を抑留した。嘉兵衛は1813(文化10)年に送還され、その尽力でゴローニンは釈放され、事件は解決した。

Q> 日本近海に出没する外国船は、人々の意識にどのような変化をもたらしただろうか。

⑤19世紀初め、イギリスと戦っていたフランスのナポレオン1世がオランダを征服すると、イギリスはオランダがアジア各地にもっていた拠点を奪おうとした。この事件で長崎奉行の松平康英は責任をとって自刃し、長崎警護の義務をもつ佐賀藩主も処罰された。

かった。この間、幕府の対外防備は増強され、1807(文化4)年には、

幕府は松前藩と蝦夷地をすべて直轄にして松前奉行の支配のもとに

おき、東北諸藩をその警護に当たさせた③。さらに翌1808(文化5)年

には間宮林蔵に樺太とその対岸を探索させた。そののち、ロシアとの

関係はゴローニン事件④を機に改善されたため、幕府は1821(文政

4)年に蝦夷地を松前藩に還付した。

北方での対外的な緊張に加えて、さらに幕府を驚かせたのは、1808

(文化5)年のイギリス軍艦フェートン号の長崎湾侵入であった。フェ

ートン号は、当時敵国になったオランダ船のだ捕をねらって長崎湾に

入り、オランダ商館員を人質にし、薪水・食料を

強要してやがて退去した(フェートン号事件)⑤。

そこで、幕府は1810(文化7)年、白河・会津両藩

に江戸湾の防備を命じた。

その後もイギリス船・アメリカ船が日本近海に

出没したため、諸藩に命じて全国各地の海岸に台

場を設け大砲を備えさせた。幕府は、船員と住民

との衝突などを回避するため、異国船に薪水・食

料を与えて帰国させる方針をとっていたが、1825

(文政8)年、異国船打払令(無二念打払令)を出

異国船打払令

一体いきりすに限らず、南蛮・西洋の儀は、御制禁邪教の国ニ候間、以来何れの浦方①ニおゐても、異国船乗寄せ候を見受け候ハバ其所ニ有合候人夫を以て、有無に及ばず、一図②ニ打払ひ、逃延び候ハバ、追船等差出すに及ばず、其分ニ差置き、若し押して上陸致し候ハバ、搦捕り、又は打留め候ても苦しからず候。……二念無く③打払ひを心掛け、図を失わざる様④取計ひ候処、専要の事に候条、油断無く申し付けらるべく候。

(御触書天保集成)

① 海辺の村。② ひたすら。③ 迷うことなく。④ 時機を逃さぬよう。

① 清・朝鮮・琉球の船は対象外で、オランダ船は長崎以外の場所では打ち扱うことにした。なお、1811(文化8)年、従来対等とされた朝鮮からの使節(朝鮮通信使)を、それまでの江戸にかえ対馬への派遣とさせた(易地聘礼)。これは経費節減とともに、新たな強国を対等とする考えから、朝鮮を対等とすることに異論が出たことが背景にあった。

② 関東の代官配下の役人の中から出役を選び出し、最初は8名で2人1組となって関八州(関東の8カ国)を巡回し、領主の区別なく無宿人や博徒の逮捕・取締りをおこなった。

Q▶ 幕領の一揆や大塩の乱は、なぜ幕府に衝撃を与えたのだろうか。また、その原因となった米不足はなぜ生じたのだろうか。

③ 郡内騒動は約80カ村1万人、加茂一揆は約240カ村1万2000人におよぶ百姓の一揆であった。ともに幕領で生じた一揆であり、幕府に与えた影響は大きかった。

し、外国船を撃退するよう命じた①。従来の「四つの窓口」で結ばれた外交秩序(鎖国)の外側のロシア・イギリスのような武力をともなう列強に対して、幕府は強い警戒心を抱き、新たな外敵として想定したのである。

文化・文政時代

1786(天明6)年に11代将軍となった徳川家斉は、松平定信が老中を辞任したのち、文化・文政期を中心に在職し、1837(天保8)年に将軍職を徳川家慶にゆずったあとも、大御所として実権を握り続けた(大御所政治)。約50年間の家斉の治世のうち、文化年間(1804~18年)までは寛政の改革の質素儉約が受け継がれた。しかし文政年間(1818~30年)になると、品位の劣る貨幣を大量に流通させたことで、幕府財政は潤い、将軍や大奥の生活は華美になった。これにより物価は上昇したが、商人の経済活動も活発になり、都市を中心に庶民文化の花が開くことにもなった。

18世紀後半から、関東の在郷町で酒・味噌・醤油などが生産されて江戸に売り出される状況(江戸地廻り経済圏)がみられ、豪農や地主が力をつける一方で、土地を失う百姓も多く発生して、荒廃地域が生じた。江戸を取り巻く関東の農村では博打が蔓延し、無宿人や博徒らによる治安の乱れも生じたため、幕府は1805(文化2)年、関東取締り出役②を設けて犯罪者の取締りをおこなった。さらに1827(文政10)年には、幕領・私領・寺社領の領主の違いをこえて、近隣の村々を組み合わせた寄場組合をつくらせ、協同して地域の治安や風俗の取締りに当たらせて、農村秩序の維持などをはかった。

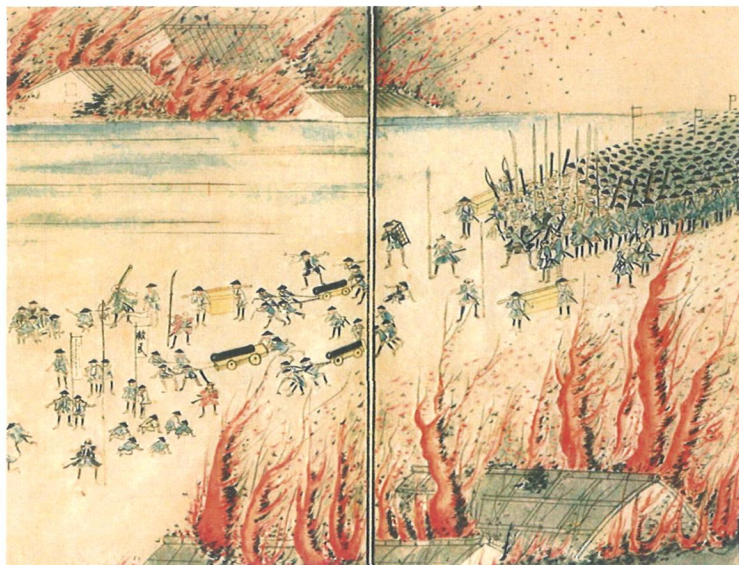
大塩の乱

天明の飢饉後、寛政・文化・文政期は比較的天候にめぐまれ、農業生産はほぼ順調であった。しかし、天保年間の1832~33(天保3~4)年には収穫が例年の半分以上の凶作となり、全国的な米不足をまねき、以後1838(天保9)年にかけてきびしい飢饉となった(天保の飢饉)。農村や都市には困窮した人々が満ちあふれ、百姓一揆・打ちこわしが続発したが、幕府・諸藩は有効な対策を立てることができなかった。

1836(天保7)年の飢饉はとくにきびしく、そのため、もともと米が不足していた甲斐国郡内地方や三河国加茂郡で大規模な一揆がおこっ

た③。

大坂でも飢饉の影響は大きく、餓死者があいついだ。しかし、富裕な商人らは米を買い占めて暴利を得る一方、大坂町奉行は窮民の救済策をとることもなく、米不足にもかかわらず大坂から江戸へ米を大量に回送していた。これをみた大坂町奉行所の元与力で陽明学者の**大塩平八郎**は、



1837(天保8)年に、貧民救済のために門弟や民衆を動員して武装蜂起した(**大塩の乱**)④。この乱はわずか半日で鎮圧されたが、大坂という重要な直轄都市で、幕府の元役人であった武士が主導して、公然と武力で反抗したことは、幕府や諸藩に大きな衝撃を与えた。

その波紋は全国に広がり、国学者**生田万**が**大塩門弟**と称して越後**柏崎**で陣屋を襲撃したり(**生田万の乱**)、各地に大塩に共鳴する百姓一揆がおきたりするなど、不穏な動きが続いた⑤。

国内問題(内憂)に加えて、対外問題(外患)も続いていた。1837(天保8)年、アメリカ商船の**モリソン号**が浦賀沖に接近し、日本人漂流民7人を送還して日本に通交を求めようとしたが、幕府は異国船打払令にもとづいてこれを撃退させた(**モリソン号事件**)。

この事件について、翌1838(天保9)年、**渡辺華山**は『**慎機論**』を、**高野長英**は『**戊戌夢物語**』を書いて、幕府の対外政策を批判した。翌年、幕府は彼らをきびしく処罰した(**蛮社の獄**)⑥。

さらに、アヘン戦争の情勢も幕府に伝えられた。

天保の改革

このような内憂外患に対応するため、幕府は、1841(天保12)年、大御所家斉の死後、12代將軍家慶のもとで老中**水野忠邦**を中心に幕府権力の強化を目指して**天保の改革**をおこなった。

忠邦は**享保**・寛政の改革にならい、まず將軍・大奥も含めた断固

大塩勢の蜂起 大塩勢は手製の
の大砲を引き出し、旗をおし
立て市中に火を放ちながら進
撃した。

『出潮引汐奸賊聞集記』、大阪歴史博物館蔵

④大塩は隠居して、自宅に家塾 洗心洞を開いて門弟を集め、陽明学を講じていた。窮民救済に当たり、みずからの蔵書売り払って得た660両余りを貧民にわけ与え、その後決起した。

⑤江戸も米不足で社会情勢が不穏になったが、幕府はお救い小屋を設けて米・金をほどこし、打ちこわしの発生を未然に防いだ。

⑥渡辺華山(三河国田原藩家老)は国元での永蟄居、高野長英(陸奥国水沢出身の町医者)は永牢に処せられ、両者はのちに自刃した。この時、2人は尚齒会という知識人の勉強会に加わっていたが、この会のほかの学者たちも別件で逮捕された。彼らは、のちに無実とされた。

人返しの法

一 在方^{ざいたた}のものの上^{うへ}に相仕舞^{あひまひ}い^①、江戸人別に
入候儀^{いりこうぎ}、自今^{じこん}以後決^{けつ}して相成^{あひなり}らず^②。
一 近年御府内^{こうねんごふうち}へ入^いり込み、裏店^{うらだな}等^{らう}借請居^{かりうけお}
り候者^{こうしや}の内ニハ妻子等^{これ}も之^{これ}無^なく、一期^{いつき}住^すみ^⑤
同様のものも之^{これ}有^あるべし。左様の類^{たぐい}ハ早々
村方^{むらほう}え呼戻^{よこ}し申^{まう}すべき事^{こと}。
(牧民金鑑^{ぼくみんきんかん})

① 所帯^{しよたい}をた^たんで。② このあとに、省略^{しょうりゃく}した部分で
職人^{しやくじん}で出稼^{でせ}ぎするものは期間^{きかん}を定め、代官^{たいくわん}・領主^{りやうしゅ}の
許可^{きょくこ}を得^えて出^でてくるように定^{さだ}めている。③ 江戸。④
町屋敷^{ちやうやしき}の裏^{うら}にある賃貸^{しやうたい}の長屋^{ちやうやしき}。⑤ 一期^{いつき}＝一季^{いっせい}。一年間^{いちねんかん}。

株仲間の解散①

菱垣廻船積問屋共^{ひしがきかいせんしむきもんやども}より、是迄^{こゝまで}年々金^{ねんねん}一万二千
両^{りやう}づつ冥^{めい}加^か上げ金納^{きんなん}め致^{いた}し来^きたり候所^{こうしよ}、問屋
共不正^{きふせい}の趣^{おもむき}も相聞^{あひきこ}こえ候に付^{につ}、以来上納^{じやうなん}に及^{およ}
ばず候。尤^{もつとも}、向後^{きやうご}右仲間株札^{みぎなかいしち}は勿論^{もちろん}。此^{こゝ}
外^{ほか}にも都て問屋仲間并組合^{なみぐみあひ}など唱^なへ候義^ぎは
相成^{あひなり}らず候。右に付^{につ}いては、是迄^{こゝまで}右船に積^{しむ}み来^き
たり候諸品^{しよしひん}は勿論^{もちろん}、都て何国^{なんこく}より出^でて候何品^{なんしひん}に
ても、素人直売^{しやうじんちくばい}買^かい^③勝手次第^{かてしだい}たるべく候。且又^{かつまた}
諸家^{しよか}国産類^{こくさんるい}④其外惣^{そのほか}て江戸表^{えどうへ}へ相廻^{あひまわ}し候品^{こうしひん}に
も、問屋に限^{かぎ}らず銘々^{めいめい}出入^{でいり}の者共等^{ものどもら}引き受^{うけ}け、
売^うり捌^{はく}き候義^ぎも、是又^{また}勝手次第^{かてしだい}候。
(「江戸町触集成」^{えどうちふしじゆうしやう})

① 一八四一(天保十二)年、十組問屋(菱垣廻船積問屋
の株仲間)への申渡書に続く町触。翌年春、十組以
外の問屋と繋結^{けんけつ}、湯屋などの株仲間にも解散を命じ
た。② 以後。③ 仲間に入っていない一般・在郷商人
の直接取引。④ 諸藩の国産品。

たる儉約令を出して、ぜいたく品や華美な衣服を禁じ、庶民の風俗も
またきびしく取り締まった^①。ついで江戸の人別改^{にんべつあらた}めを強化し、百
姓の出稼^{でせ}ぎを禁じて、江戸に流入した貧民を帰郷させる人返し^{ひとがえ}の法^②
を出し、天保の飢饉で荒廃した農村の再建をはかった。印旛沼の掘割
工事による干拓^{かんたく}にも、再度、取り組んだ。

また物価騰貴の原因は、十組問屋などの株仲間が上方市場からの
商品流通を独占しているためと判断して、株仲間の解散^{→p.197}を命じた。こ
れにより江戸の株仲間外の商人や、江戸地廻りの在郷商人らの自由な
取引による物価引下げを期待したのである。しかし、物価騰貴の実際
の原因は生産地から上方市場への商品流通量の減少であったため、株
仲間の解散はかえって江戸への商品輸送量を乏しくすることになり、
逆効果となった^③。物価騰貴は、旗本や御家人の生活も圧迫したので、
幕府は棄捐令^{きけんれい}も出し、あわせて札差などに低利の貸出しを命じた。こ
のような生活と風俗へのきびしい統制と不景気とが重なり、人々の不
満は高まっていた。

一方、幕府は、相模の海岸防備を担わせていた川越藩の財政を援助
する目的から、1840(天保11)年に川越・庄内・長岡3藩の領知をた
がいに入れかえる^④ことを命じたが、領民の反対もあって翌年に撤回
された。幕府が転封を決定しながらその命令が徹底できなかったこと
は、幕府に対する藩権力の自立を示す結果となった。

1843(天保14)年には、将軍家慶が67年ぶりに日光社参を実行して幕

① 高価な菓子・料理なども禁
じたほか、江戸に211軒あつ
た寄席を15軒に減らし、歌舞
伎(三座)を浅草のはずれに移
転させ、役者が町を歩く時に
は編笠をかぶらせた。また、
人情本作家の為永春水^{（おのゑふしやうすい）}らも
処罰した。

② この強制で、無宿人^{むしゆくじん}や浪
人^{らうじん}らも江戸を追われ、江戸周
辺の農村の治安はますます悪
化した。

③ 生産地から上方市場に商品
が届く前に、下関や瀬戸内
海の港で内海船(尾州廻船)
などにより、商品が売買され
てしまうことがあった。商品
流通の基本ルートがかわされ、
機能しなくなりはじめていた
のである。そのため10年後の
1851(嘉永4)年に株仲間の再
興がおこなわれた。

④ 川越藩が豊かな庄内藩へ、
庄内藩が越後長岡藩へ、越後
長岡藩が川越藩へ移るもので、
三方領知替^{さんぽうりやうかへ}と呼ばれる。

府権力の起死回生をはかろうとしたが、多大な出費による財政悪化と、夫役に動員された農民たちの不満をもたらしただけであった。

さらに水野忠邦は、1843(天保14)年に上知令を出し、江戸・大坂周辺のあわせて約50万石の地を直轄地にして、財政の安定や対外防備の強化をはかろうとした。しかし、代替地を用意したものの、上知令も譜代大名や旗本に反対されて実施できず、忠邦は老中を退き、印旛沼工事も中止された。改革の失敗は改めて幕府権力の衰退を示した。

経済の変化

農業生産から米で年貢を取り立てることを基礎とする幕藩体制は、とくに天保の飢饉の前後に各地で行き詰まりが顕著になった。北関東の常陸・下野両国の人口は、享保年間(1716~36年)に比べ、19世紀半ばには約30%減少し、田畑の荒廃もみられた。逆に生産力の高まった周防や薩摩では、人口が約60%も増加する地域があり、地域間の格差が広がった。

また畿内を中心に、菜種・綿・金肥などをめぐり、生産地の百姓や在郷商人が、自由な流通を求めて大坂の株仲間などによる流通支配に反対し、国や郡全体の広い範囲を巻き込む大規模な訴訟闘争(国訴)をおこした。

このような社会や経済構造の変化は、村と百姓に支えられていた幕藩体制をおびやかす危機となるため、対応策が求められた。二宮尊徳(金次郎)の報徳仕法や大原幽学の性学のように、荒廃田を回復させて農村を復興させる試みもみられたが、村々では、すでに都市商人の資金を背景に、特産物である商品

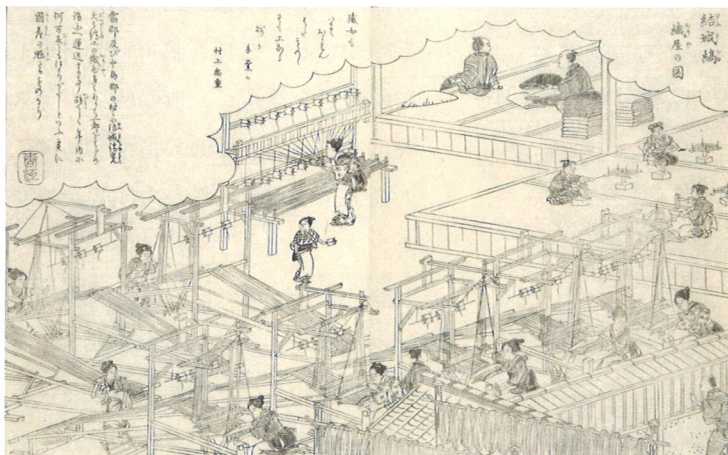
作物の生産や加工・運輸が広く組織されていた。また賃金で雇われる日雇労働で生計を立てる貧しい百姓も増大しており、農業の復興策だけでは幕藩体制の危機を防ぐことはできなかった。

19世紀に入ると、問屋制家内工業がさかんにおこなわれる一

Q 天保の改革での諸政策は失敗に終わったが、その根本的な原因はどこにあったのだろうか。

結城縞の生産 江戸時代中期から綿織物生産が全国に広まった。図で描かれる結城縞は、高度な技術により極細の綿糸と絹糸とを交織する上級品で、19世紀前半から、尾張西部で生産が盛んになった。図は、織屋の中で多くの女性(織女)たちが分業と協業で働く様子である。

(『尾張名所図会』、国立公文書館蔵)



Q▶ 変化する経済活動の中で、利益(富)を取得できたのは、だれだろうか。いくつもの階層について考えてみよう。

①すでに江戸時代前期において、摂津の伊丹・池田・灘などの酒造業では、工場制手工業がみられた。

Q▶ 19世紀に朝廷の権威が上昇した背景にはどのような要因があるのだろうか。

②水戸の会沢安(正志斎)は1825(文政8)年に『新論』を著し、天皇を頂点に位置づける国体論を提示した。

③神職・陰陽師など宗教者や職人たちへの免許状や、蹴鞠・書道などの免許状。

④幕府は長崎を窓口にして、清との倭物貿易を独占していたが、薩摩藩は松前から長崎に向かう途中の船から倭物を買上げ、これを琉球王国を通して清に売る密貿易をおこなって利益を上げた。そこにも、幕府支配のゆるみがみられる。

方、一部の地域では地主や問屋(商人)が工場を設け、農業から離れた奉公人(労働者)を集めて、分業と協業による手工業生産を営んだ。これを工場制手工業(マニファクチュア)と呼び、天保年間(1830~44年)頃には大坂周辺や尾張の綿織物業、桐生・足利など北関東の絹織物業などでおこなわれた①。

これに対し諸藩は、藩政改革を進める中で、新しい経済活動が生み出す利益を積極的に取り込む方法として、以前から一部でみられた藩専売制や藩営工業などに取り組んでいった。

朝廷と雄藩の浮上

「内憂外患」といわれる国内外の危機的状況に對し、幕府権力が弱体化して威信を発揮できなくなると、これにかわる上位の権威として天皇・朝廷が求められはじめた②。

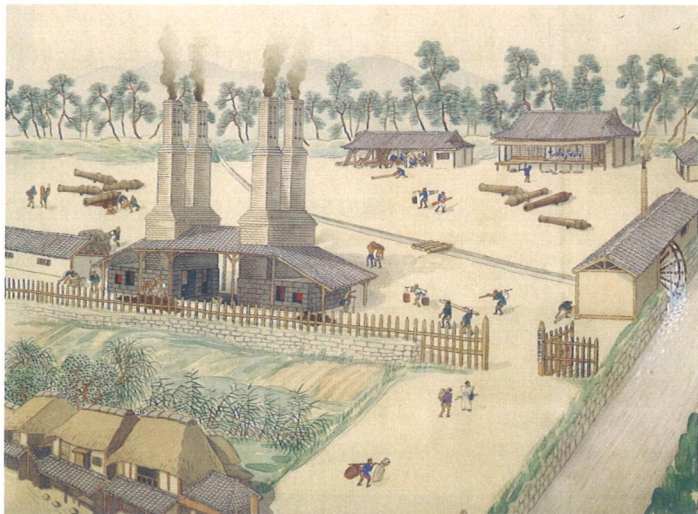
朝廷の側からも、光格天皇のような朝廷復古を求める考え方が強く打ち出された。公家たちも財政に苦しみ中で、各種の免許状③を発行して収入を得ようと活動し、社会の側にも朝廷の権威を求める動きが広がった。

諸藩も、外様を中心に幕府権力からの自立の道を求めるようになり、中・下級武士の有能な人材を登用して、財政の再建と藩権力の強化を目指す藩政改革がおこなわれていった。鹿児島(薩摩)藩では下級武士から登用された調所広郷が1827(文政10)年から改革に着手し、三都の商人からの莫大な借財を事実上棚上げにし、また奄美三島(大島・徳之島・喜界島)特産の黒砂糖の専売を強化し、琉球王国との貿易を増やすなどして、藩財政を立て直した。さらに島津斉彬は鹿児島に反射炉を築造し、造船所やガラス製造所を建設した。ついで島津忠義はイギリス人技師の指導で紡績工場を建設し、この間、長崎の外国人商人グラブヴァーらから洋式武器を購入して、軍事力の強化もはかった。

萩(長州)藩では、村田清風が多額の借財を整理し、紙・蠟の専売制を改革した。さらに越前方において、下関に入港する北前船などの廻船を相手に、本来上方に運ばれるべき商品(越前)を購入し、委託販売することなどで収益を上げ、財政の再建に成功した。

佐賀^{ひぜん}(肥前)藩でも藩主^{なべしまなおまさ}鍋島直正^{1814~71}が均田制を実施し、直轄地の小作^{きんでんせい}の納入を猶予したり、町人地^{りよう}主の所有地の一部を藩に返させる

などして、本^{ほん}百姓^{びやくしやう}体制の再建をはかった。また有田焼など陶磁器の専売を進めて藩財政に余裕を生み出し、反射炉を備えた大砲製造所を設けて洋式軍事工業の導入をはかるなど、藩権力を強化した。



高知^{とさ}(土佐)藩でも「おこぜ組」と呼ばれる改革派が支出の緊縮をおこなって財政の再建につとめた。一方、水戸藩のように、藩主^{なりあき}徳川斉昭^{1800~60}の努力にもかかわらず、藩内の保守派との抗争で改革が成功しなかった例もある。

改革に成功した薩^{さつ}長^{ちやう}土肥^{とひ}などの大藩のほか、伊達宗城の宇和島藩、まつだいらよしなが^{しゆんがく}松平慶永^{1828~90}(春嶽)の福井^{ふくい}(越前)藩などでも有能な中・下級武士を藩政の中枢に参加させ、また三都の商人や領内の地主・商人との結びつきを深めて、藩権力の強化や財政再建に成功した。これらの諸藩は社会の変化に即応した新しい動きをとることで、西国の雄藩として幕末の政局に強い発言力をもって登場するようになる。

幕府も、代官^{だいگان}江川太郎左衛門^{えがわ たろうざ}(垣庵)^{1801~55}に命じて伊豆^{いず}斐山^{ひさん}に反射炉を築かせた。これらの幕府や雄藩の洋式工業は、明治維新後に官営工業の模範となった。

佐賀藩が設置した反射炉

1850(嘉永3)年に設立された大砲製造所に引き続き、1854(安政元)年に完成された反射炉。幕府の注文を受けて大砲製造をおこなった。煙が出ているのが反射炉で、熱反射による高熱でとけされた金属は、大砲の鋳型に流し込まれた。

(考証復元図、鍋島報效会蔵、佐賀県)

4 化政文化

化政文化

宝暦・天明期に多様に発展しはじめた文化は、寛政の

改革によりいったん停滞するが、19世紀に入ると再び

息を吹き返した。11代将軍徳川家斉の半世紀におよぶ長い治世のもと、文化・文政期を中心に、天保の改革の頃までの時期の文化を化政文化と呼ぶ。

Q▶ 庶民の文化はどのように発達したのだろうか。

化政文化では、江戸をはじめとする三都の繁栄を背景として、民衆を基盤とする町人文化が最盛期を迎えた。化政文化は、都市の繁栄、商人や身分をこえた文人らの全国的な交流、出版・教育の普及、交通網の発達などによって、様々な情報とともに全国各地に伝えられた。また都市生活が成熟する中で、文化の内容も多種多様なものとなった。

学問・思想の動き

学問・思想の分野では、18世紀末から表面化した幕藩体制の動揺という現実を直視し、政治や社会を批判的にみて、古い体制を変革する方法を模索する動きが現れた。

都市や村々の実情に接する人々の中から、封建制度の維持や改良を説く経世家の活動が活発になった。海保青陵は『稽古談』で商売をいやすいものとする武士の見方を批判して、藩財政の再建は商品経済の発展をもたらす殖産興業によるべきと主張し、本多利明は『経世秘策』で西洋諸国との交易や蝦夷地開発による富国策を説いた。また、佐藤信淵は『経済要録』で産業の国営化と貿易による重商主義をと

「西域物語」も著した。

水戸学では、19世紀の前半になると、藩主徳川斉昭を中心に藤田鳴谷とその子の東湖、会沢安らの学者が出て尊王攘夷論を説き、幕末の思想や倒幕運動に大きな影響を与えた(後期水戸学)。

国学では、本居宣長の死後、平田篤胤による復古神道が盛んになった。篤胤の死後も、弟子たちの手で、とくに中部地方や関東で武士や豪農・神職に広く浸透して多くの門人が生まれ、幕末期の内外の危機的状況の中で、現実の政治を動かす思想となった。

19世紀初めから幕末期にかけて、いくつかの民衆宗教が生まれ、多くの信者を得た。その中には女性の教祖や指導者も含まれ、不

貿易論

日本は海国なれば、渡海・運送・交易は、固より國君の天職。最第一の国務なれば、万国へ船舶を遣りて、国用の要用たる産物、及び金銀銅を抜き取て日本へ入れ、国力を厚くすべきは海国具足の仕方なり。自國の力を以て治る計りには、国力次第に弱り、其弱り皆農民に当り、農民連年耗減するは自然の勢ひなり。

(『経世秘策』)

①(ここでは將軍を指す。②十分に備え、整える。

①信濃国伊那郡の松尾多勢子(1811~94)のような女性の運動家も生まれた。

②不二道・黒住教・天理教・金光教など(→p.230)。

③天理教の教祖中山みき(大和、1798~1887)や、不二道の松下千代(信濃、1799~1872)などが知られる。

二道では男女の平等を説く教
えもみられた。

また、この時期以降、全国
各地の豪農・豪商の中から
多くの知識人・文化人が輩出
した。彼らは、自分の家や地
域の歴史を実証的に研究し、
また漢詩・和歌・俳諧などの
同好の会をつくって武士身分
の者を含む都市の文化人と交
流したり、平田派国学の門人
となって活動するなど、近世
後期の文化活動において重要
な役割を果たした。なかでも

下総佐原の商人で天文方に学んだ伊能忠敬は、幕府の命を受けて全国
の沿岸を実測し、「大日本沿海輿地全図」の完成に道を開いた。

洋学では、幕府が天文方の高橋至時に西洋暦を取り入れた寛政暦を
つくらせた。また天文方に**蛮書和解御用**を設け、至時の子高橋景保
を中心に洋書の翻訳に当たらせた。元オランダ通詞の志筑忠雄は『暦
象新書』を著し、ニュートンの万有引力説やコペルニクスの地動説
を紹介した。

洋学の研究は、1828(文政11)年のシーボルト事件や、天保期の蛮
社の獄など、幕府の弾圧を受けたこともあり、幕府を批判する思想や
政治運動には結びつかず、医学・兵学・地理学などの科学技術に限る
実学としての性格を強めていった。

教育

文化・文政期から天保期に、学者たちにより私塾が各
地でつくられた。儒学者広瀬淡窓が豊後日田で開いた咸
宜園や、蘭学者**緒方洪庵**が大坂で始めた**適々斎塾**(適塾)、**吉田松**
陰の叔父が長門萩に設立した**松下村塾**などが有名である。また洋学
研究への関心が高まる中で、オランダ商館医であったドイツ人**シーボ**
ルトが、文政期に診療所と**鳴滝塾**を長崎郊外に開き、**高野長英**らの



大日本沿海輿地全図 伊能忠敬は、
蝦夷地から始めて17年間で全国
の沿岸を測量した。忠敬の死後に、
弟子たちが実測図を完成させた。
現代の地図と重ねてその正確さを
みたい。(部分、国立国会図書館蔵)

Q▶ 伊能忠敬が日本全図を
作成した目的と、時代背景
は何だろうか。

④ 幕末期に洋学の教育研究機
関である**蕃書調所**(→p.231)と
なり、近代以降における大学
の前身となった。

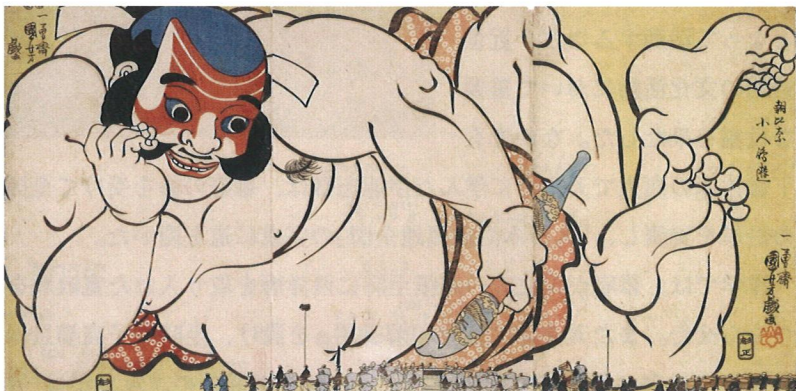
⑤ 1828(文政11)年、シーボル
トは帰国の際、持ち出し禁止
の日本地図をもっていたため
に国外追放の処分を受け、地
図をわたした天文方高橋景保
ら関係者も処罰された。シー
ボルトは帰国後、『日本』など
を著して、ヨーロッパにおけ
る日本研究の第一人者となっ
た。

⑥ 幕末の開国論者**佐久間象**
山は「東洋道德、西洋芸術(技
術)」を説いた。



「富嶽三十六景 山下白雨」
夕立の中、雷光ひらめく瞬間、
浮かび上がる夏の富士を雲上
の視座で活写する。(葛飾北斎筆、
山口県立萩美術館・浦上記念館蔵)

「朝比奈小人嶋遊」鎌倉時代の和田義盛3男で剛勇名高い朝夷三郎は、読本や歌舞伎で「朝比奈もの」の主人公として庶民の人気を集めた。1847(弘化4)年に浅草で巨大な張りぼての朝比奈人形が見世物に出て騒ぎとなった。朝比奈がちっぽけな大名行列を見下す様子を描く。(歌川国芳筆、たばこと塩の博物館蔵、東京都)



人材を育てた。これらの私塾は、全国から多くの塾生を集め、幕末から明治初めに活躍する人材を育てた。

「浮世風呂」

文学

文化・文政期には、滑稽さや笑いとともに、庶民の生活をいきいきと描いた絵入りの滑稽本が盛んになり、式亭

三馬や十返舎一九が現れた。また、恋愛ものを扱った人情本も庶民に受け入れられたが、代表的作家である為永春水は、天保の改革で処罰された。これらに対し、文章を主とする小説で歴史や伝説を題材にした読本は、江戸の曲亭馬琴が勧善懲悪・因果応報を盛り込む作品を描いて評判を得た。

①馬琴の『南総里見八犬伝』は雄大な構想をもち、その底流に勧善懲悪・因果応報の思想が流れている。

俳諧は民間にも広くいきわたり、各地で俳人を生んだ。その中で、信濃の百姓小林一茶は村々に生きる民衆の生活をよみ、おびただし



鷹見泉石像 蘭学の先輩でもある下総古河藩の家老鷹見泉石(1785～1858年)を描く。西洋画の手法を取り入れた肖像画の傑作。(渡辺華山筆、縦115.5cm、横57.2cm、東京国立博物館蔵)



歌川広重筆「名所江戸百景 亀戸梅屋敷」(左、1857年)とゴッホ画「ジャポネズリー、花咲く梅の木(広重を模して)」(右、1887年) 前面の大きな梅の木と後景の梅林を対比的に描く構図が特徴的で、ゴッホはカンバスに油絵で模写した。

(東京国立博物館蔵、ファン・ゴッホ美術館蔵)



を始め、大きな影響を与えた。また越後の禅僧良寛は、暮らしに素材を求める独自の作品をつくった。

このほか、越後の鈴木牧之は山東京伝・曲亭馬琴ら江戸の文化人とまじわり、『北越雪譜』を出して、雪国の自然や生活を紹介した。

5

美術

全国各地に名所が生まれ、民衆の旅も一般化する中で、錦絵の風景画が流行し、葛飾北斎・歌川広重らの絵は安価で広く普及した。また幕末期にかけて、歌川国芳らは世相や政治を批判する錦絵を制作した。これらの錦絵は開国後、海外に多く紹介され、ヨーロッパの印象派画家たちにも大きな影響を与えた。

10

従来からの絵画では、円山派からわかれ、呉春(松村月溪)が始めた四条派が、温雅な筆致で風景を描き、上方の豪商らに歓迎された。また文人画は、豊後の田能村竹田、江戸の谷文晁とその門人渡辺崋山らの出現で全盛期を迎えた。

民衆文化の成熟

文化・文政期には、三都をはじめ、多くの都市で常設の芝居小屋がにぎわい、また盛場では見世物・曲芸・講談などの小屋、さらに町人地でも多数の寄席が開かれるなど、都市の民衆を基盤とする芸能が盛んになった。歌舞伎では、7代目市川團十郎や尾上・沢村・中村らの人気役者とともに、

②北斎には富士山を多様に描く『富嶽三十六景』(全46枚)、また広重には東海道の宿場町やその周辺を描く『東海道五十三次』(全55枚)などの代表作がある。

③美濃大垣藩医の娘である江馬細香のような女性の文人画家も現れた。

すもう こうぎょう
相撲の興行 寺社や橋の修復などの
目的で、観覧料をとって興行が
おこなわれた相撲を勧進相撲とい
った。元禄の末頃から許可され、
のちには名目なしで幕府から公認
され職業となった。

(日本相撲協会蔵、東京都)

① 幕末から明治期にかけて狂
言作者の河竹黙阿弥が活躍し、
盗賊を主人公にした白浪物な
どが評判を呼んだ。

② 開帳とは寺の秘仏などを開
扉して人々に公開すること。
都市の発展とともに、江戸・
京都など他所へ出張する出開
帳も盛んになった。信濃の善
光寺の出開帳などは有名であ
る。

③ 三河の国学者菅江真澄は40
年にわたって東北各地を旅し、
その見聞を『菅江真澄遊覧記』
として残した。

④ 日待は神に酒肴を供えて一
晩こもり、翌朝の日の出を待
つ行事である。月の出を拝す
る行事に月待がある。庚申講
とは干支で年6回ある庚申
の日の夜、徹夜で過ごす行事。
人の体内には3匹の虫(三戸
虫)が棲み、庚申の夜、睡眠
中に体外に出て天帝にその人
の悪事を告げると、当人は早
死にするとされた。これを防
ぐため、集団で飲食し夜を徹
する集まり。



つる や なんぼく きょうげん
鶴屋南北らすぐれた狂言作者が出て人気を得た①。これらは、錦絵
1735～1829

や出版物、また三都の役者による地方興行などによって、全国に伝
えられ、各地で役者集団が生まれた。こうした中で、村々の若者が中
心となって、歌舞伎をまねた村芝居(地芝居)や人形芝居が各地で取り
組まれ、祭礼や花火などとともに村人の大切な娯楽となった。そして、
歌舞伎の衣服・化粧・小道具・言葉遣いなどは、芝居を通じて民衆文
化に大きな影響を与えた。

有力な寺社では、修繕費や経営費を得るために、境内で縁日や開
帳②・富突(富くじ)などをもよおし、多くの人々を集めた。また湯
治や物見遊山など、庶民の旅も広くおこなわれ③、伊勢神宮・善光
寺・讃岐金毘羅宮などへの寺社参詣や、聖地・霊場への巡礼がさか
んにおこなわれた。また五節句や彼岸会・盂蘭盆会などの行事、日
待・月待や庚申講④などの集まりのほか、町や村々を訪れる猿廻しや
万歳、盲人の瞽女・座頭などによる芸能が、人々を楽しませた。

第10章のまとめ

- 問1 幕藩体制の動揺に大きな影響を与えたできごととして、何が考えられるだろうか。また、その理由は何だろう
うか。
- 問2 幕藩体制の動揺に際して、江戸幕府はどのような対策をおこなっているだろうか。おもな政策をあげてみよ
う。またそれは、成功したといえるか考えてみよう。
- 問3 近世後期の諸産業や文化において、近代への大きな転換と考えられる変化には、どのようなことがあるだろ
うか。